

第130回 三方限古典塾（'17, 8, 17）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その3）

1 沈静なるは最もこれ美質なり。蓋し心存して放たれざる者なり。今の人^は独り居て事なければ、すでに自ら岑寂にして耐え難く、纔に事に応じ人に接すれば、便ち口に任せ情を恣にす。即しこれ清狂なるも、また徳を蓄うるの器に非ざるなり。

（修身）

（意識） 落ち着いて物静かであること、これが最高の資質である。なぜなら、そういう人は、心がしっかりと座り浮ついていないからだ。

ところが近頃の人間は、独りでいると静かさや寂しさに耐えられなくなるし、何か問題にぶつかったり人に会ったりすると、こんどは押さえがきかなくなって、出かませをしゃべる。これでは一人で超然としていても、徳のある人物とは言えない。

（参考）呻吟語・談道「三氏の伝心の要法は一の静の字を離れず。手を下す処は皆これ欲を制す。帰宿する処は都てこれ無欲なり。これは則ち同じ。」（三氏：儒教・道教・仏教）

呻吟語・存心「天地万物の理は、静に出でて静に入る。人心の理は、静に発し静に帰る。静は万物の橐籥、万物の枢紐なり。動中に発出し来たれば、天則と便ち相似ず。故に暴肆の人と雖も、平旦には皆良心あるは、静に発すればなり。過ちて後に皆悔心あるは、静に帰ればなり。」（橐籥：ふいご）

呻吟語・存心「静の一字は十二時離れしらず。一刻も纔に離るれば便ち乱れ了る。門は尽日開闔すれども枢は常に静かなり。妍媸は尽日往来すれども鏡は常に静なり。人は尽日応酬すれども心は常に静なり。ただ静なり。故に能く動を張主し得。若し動を逐いて去れば、事に応ずること定ず分曉ならず。便ちこれ睡る時もこの念ならずば、箇の夢兒を作すも胡乱なり。」

2 沈静は緘黙の謂に非ざるなり。意・淵涵にして態・間正なるは、此れを真の沈静と謂ふ。終日言語し、或いは千軍万馬中に相攻撃し、或いは稠人公衆の中に繁劇に應ずるも、其の沈静たるを害はず。神定まれるが故なり。

一たび飛揚動擾するの意あらば、端座すること終日寂として一語なしと雖も、而かも色貌自ずから浮く。或いは意、飛揚動擾せずと雖も、而かも昏昏として睡らんと欲するは、皆沈静と謂うことを得ず。真の沈静なる底は、自ずから惺々にして、一段全幅の精神を包みて裏に在るなり。

（存心）

（意識） 落ち着いて静かであるということは、単に口を閉ざし黙っていることではない。心が深く澄んでいて、態度がゆったりして正しいことが真の沈静である。終日語り合い、あるいは戦場で激しく攻撃し合ったり、大勢の中で慌ただしく応接していても沈静を損なうことはない。なぜなら、そこでは心の本体が定まっているからだ。

ところが、少しでも心が上ずったり乱れたりすれば、一日中端座して沈黙していても、自ずからそれが表情に表れてくる。仮に心が上ずったり乱れたりしていなくても、ぼんやりして眠ったようにぼんやりしているのも沈静とは言えない。真の沈静とは、心がすっきりと冴え、その中にひとときわ全き精神を包みこんでいる状態をいうのである。

（余説）沈静ということの重要さと、本当の沈静の難しさとを繰り返して説明しています。

3 悟とは吾が心なり。よく吾が心を見れば、便ち是れ真の悟なり。 (問学)

(意識) なるほどと道理に目覚めさせるものは、自分の心の中にある。自分の心の奥底までしっかりと洞察することが、道理に目覚めることである。

(参考) 呻吟語・人情「衆これを悪むも必ず察し、衆これを好むも必ず察するは、易し。自らこれを悪むも必ず察し、自らこれを好むも必ず察するは難し。」

老子・上篇「人を知る者は智なり。自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力あり。自ら勝つ者は強し。足るを知る者は富む。強めて行う者は志有り。其の所を失わざる者は久し。死して而も亡びざる者は 寿 し。」(講談社学術文庫・113p)

吉田兼好・徒然草「賢げなる人も、人の上をのみはかりて、おのれを知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふ 理 あるべからず。されば、おのれを知るを物知れる人といふべし。」(百三十四段)

道元・正法眼蔵「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、方法に証せらるるなり」(現成公案)
(全ての物事が自然に明らかになる)

4 公論は衆口一詞の謂に非ざるなり。満朝皆非にして一人是なれば、則ち公論は一人に在り。 (治道)

(意識) 公平無私の正論というものは、衆人の言うところが一致しているという意味ではない。朝廷の人すべてが皆間違っていて、一人だけが正しいことを主張したならば、公論はその一人のほうにある。

(余説) 民主主義の名の下にある多数決の弊害を看破した言葉です。このところ、国の内外における政治の現状から「民主主義の限界だ」と度々言われています。

国会で強行採決が行われると、野党から「民主主義が踏みにじられた」という声が出る一方で、与党からは「選挙で選ばれた議員の多数決によって議決したのだから、民主主義を貫徹している」という反論も出されます。これは一体どういうことなのでしょうか。

米国 16 代大統領リンカーンの「人民の人民による人民のための政治」は、民主主義を単純明快に表現していますが、その実践は簡単ではありません。

我が国をはじめ、多くの国では代表民主主義としての「議会制民主主義」をとっており、直接民主制としての「国民(住民)投票」も行われますが、それぞれ限界があります。

さらに、マスコミの威力によって毀誉が左右されやすく危惧されます。言論というものは、なかなかその真実がわからないものです。それについて、孟子は「我、言を知る」として「諛辞・淫辞・邪辞・遁辞」(偏った言論・度が過ぎる言論・邪な言論・逃げ口上)の四つを知るべきだと教えています。

(参考) 呻吟語・人情「勢・利・術・言、此の四つの者は、公道の敵なり。手を炙りて熱す可ければ、則ち公道為に屈す。賄賂潜かに通ずれば、則ち公論為に屈す。智巧陰かに投ずれば、則ち公道為に屈す。毀誉 肆に行はるれば、則ち公道為に屈す。世の幸を冀ひ誣を受くる者、皆に金の五のみならざるなり。慨す可きかな。」